

実習指導者研修会（8月17日14:40～16:10）

プロセスレコードを用いた 実習指導を考える （精神保健看護学）

日本赤十字看護大学
堀川英起

1

看護師に求められる感性

「気になること」に「気を配ること」

■看護師にはまず、具体的な援助の前に、「自力で健康を守ることのできない人（老人、乳幼児、病人、障害者）の様子が自然に気になる」という感性のあり方が求められている。

■そして、“何が気になったのか”を吟味したうえで、“どのような時期に”“どのような手助け”が必要なのかについて、瞬時に“判断がつく”ことも、看護師に求められる感性のあり方だろう。

文献1) p17

3

精神保健看護学実習前の
学生の準備状況

■問題解決法の発想を身につけている。

■精神科患者をどう捉えたらよいか分からない。

■感情に目を向ける習慣がない。

2

プロセスレコードを用いた実習指導

■ステップ1

プロセスレコードを書けるように支援する

■ステップ2

プロセスレコードを読み解けるよう支援する

■ステップ3

学生とどのように関わったらよいかを考える

4

ステップ1

プロセスレコードを書けるように支援する

プロセスレコードを記述する際のポイント

【患者の言動／様子】（見たこと聞いたこと）

- ・見たことが書けているか

【学生の気持ち】（感じたこと考えたこと）

- ・感じたことが書けているか

【やりとりの意味】【全体のプロセスから分かったこと】

- ・学生の気持ちと言動のずれに着目できているか
- ・患者の言動の奥にある思いを推測しようとしているか。
- ・相互作用に着目できているか。
- ・患者の反応を踏まえて、どのような意図で働きかけようとしたか

5

6

患者の言動／様子	そのときの学生の気持ち	学生の言ったこと／行ったこと	やりとりの意味
①	②	③	
④	⑤	⑥	
全体のプロセスからわかったこと／わからなかったこと			

7

演習1 【プロセスレコード（受け持ち3日目）】

■書けていること

■不十分なところ・気になるところ

8

ステップ2

プロセスレコードを 読み解けるよう支援する

9

学生のプロセスレコードを読む時の構え

■前提

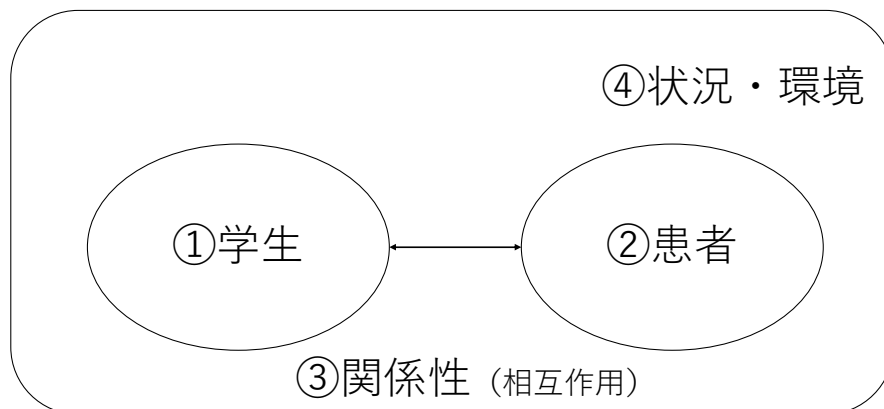
対人関係のあり方を読み取るといっても、目に見えるのは対人関係を構成する双方の言動のみで、人と人との相互作用は直接的な形で目に見えない。対人関係の理解とは、目に見えないものを明るみに出す作業である。

■必要な構え

看護とはこういう働きかけだという既成観念をいったん保留して、学生と患者の間にどういう相互作用が生じているかを考える。

10

事例の4局面を意識する



11

演習2 【プロセスレコード（受け持ち4日目）】

①学生の関わりでよかったところはどこだと思いますか？

②最も気になったやりとりはどこですか。

③あなたが指導者だったら、このプロセスレコードを書いた学生にどのようなコメントをしますか。

12

ステップ3

学生にどのように 関わったらよいかを考える

13

学生に対して覚えやすい違和感

■学生の資質への疑い

学生の患者に投げかけた言葉や心の中に浮かんだ内容が、看護職にふさわしくないように思える。

■学生の表現力への疑問

表現が稚拙であったり、誤字があったり、話の辻褄が合わない。

15

感情の自覚・表現を支援するポイント

■感情の自覚・識別

・感情それ自体が乏しい場合や、感情は豊かでもそれを的確に表現できるだけの言葉が身についていない場合がある。

■感情の意味の探索

・なぜそのような感情を抱いたのかをたずねてみる。

■感情の表現—意義を伝える

- ・患者のニーズ（本音）を引き出すために必要。
- ・疑問／驚き／困惑を伝えても、関係性を崩しにくい。
- ・相手の反応に意識的に関心を向けることが重要。

14

演習3 学生との関わりについて

■工夫していること

■難しいと感じること

■学生に学んでほしい、経験してほしいと思っていること

16

指導者の方のサポートで役立ったこと (学生の感想から)

- 「患者の言動の意味を理解するのに必要な情報をタイムリーにフィードバックしてくれた」
- 「受け持ちナースや他職種（主治医、OT、PSW）から患者さんの話を聴かせてもらえる場を用意してくれた」
- 「どのように患者さんに伝えたらよいかの表現を一緒に考えてくれた」

17

■学生との関わりを考えるためのヒント

1. できていることに言葉を与える
【学生】「できている援助を肯定的に伝えてくれたので励まされた」
2. マメに声をかける（→相談しやすい雰囲気を作る）
【実践例】「何かあったらいつでも声かけて」「何か気になっていることは？」
「何か困っていることある？」
3. 学生が選択できる余地を残す声かけ（→押し付けない工夫）
【実践例】「教員の助言は考えるヒントと思ってほしい。スルーしてもよい」
「私は～と思うけど、どう思う？」
4. 学生の表現を促すための工夫
【学生】「カンファレンスで行き詰まったり、停滞した時に、タイミングよく質問してくれ、助けてもらったのがよかった」
「その時、どう思ったの？どうしてそう思った？という質問によって、自分の考えを深めることができた」

18

5. ノルマを課したほうが、自分の意見を言いやすいことがある

【実践例】「指導者への午前中の報告時、一つは質問をしてほしい」
グループ場面で指名して発言の機会を設ける

6. 具体的に何をしたらよいか分かるように助言する

【学生】「実際にどうしたらよいかを具体的な言葉で一緒に考えてくれたのが助かった」
【実践例】「私が同じ立場だったら、～と言うかもしれない」
指導者の方に患者さんとの関わりを見せてもらう。

7. フィードバックについて

ほとんどの学生は、指導者や教員からのフィードバックを楽しみにしている。

【学生】ポイント：「その日のうちに」「提案調で」「考える余地を残す」
「コメントが『このようにするとさらによい』という書き方だったので、プレッシャーがないのでよかった」「どういう関わりをすればよいのか、コメントから自分なりに考えることができた」
「その日のうちにコメントが返ってくるとすぐに生かせるのでよかった」

19

文献

- 1) 宮本真巳（2003）「援助技法としてのプロセスレコード」精神看護出版.
- 2) 宮本真巳（2019）「改訂版 看護場面の再構成」日本看護協会出版会.

20